

# 「線分の比喻」について

小島 和男

## 1 はじめに

『国家』中盤においてプラトンは、登場人物ソクラテスに、理想国においては支配者として哲人王が求められるという主張を展開させる。ソクラテスはその哲人王となる者が教育において学ぶべき最大ものとして、正義以上のものがあると言い、それは善のアイデアであると言う。その善のアイデアを説明するために、プラトンがソクラテスに語らせたのが、「太陽の比喻」であった。

「太陽の比喻」の中で、ソクラテスは善のアイデアを語る。

それでは、この、知られるものどもに真理を提供し、知るものには知る力を配当するものが、善のアイデアなのだと同意したまえ。(508E1～3)

それゆえ、知られるものどもにとっても、善(のアイデア)のおかげで可能なのは、知られるということだけではない。在るという

「線分の比喩」について（小島）

ことと実在も、かのも（善のイデア）のおかげで知られるものどもに加わるのであり、善（のイデア）は実在ではなく、位においても力においても、実在のはるかかなたに凌駕してあるのだと、主張すべきなのだ。（509B6～10）

しかし、ソクラテスの対話相手であるグラウコンは、それで満足せず、こう促す。

ほかのことはともかく、太陽と似ている点について、まだ残っている話があれば、やめずにさらに詳しく話していただませんか。（509C5～6）

これを受けてソクラテスは、「線分の比喩」を語る。

とすると、「線分の比喩」は、善のイデア が「太陽と似ている点について」の、「太陽の比喩」に続く更なる説明、ということになる。だが、「線分の比喩」において、善のイデア を直接的に表す言葉（善 αγαθόν もしくは 善のイデア ἰδέα του αγαθου）は、この冒頭の箇所以外、ほとんど出てこない。とすると、そもそも「線分の比喩」では、善のイデア が語られているのだろうか。語られているとしたら、どのような形で語られているのだろうか。それは、グラウコンの聞きたい「太陽と似ている点について」語っているのだろうか。

本論では、「線分の比喩」について、まずはテキストをそのまま読んでいき、次に特に20世紀後半の研究を振り返りながら、それらの研究の至らない点を指摘しつつ、いくつかの論点についての解釈を明示し、それらの問題について考えていきたい。

## 2 「線分の比喩」読解

僕は言った。それでは考えたまえ。僕達が言っているように、これらふたつがあり、一方は可知の種族と場所の王であり、他方は反対に可視の種族と場所の王である。「天空の」と言って、君に僕がその名称に関して、知ったかぶっていると思われないように「可視の」と言っているのだがね<sup>1)</sup>。少なくとも君はそれら2つの種類、可視的なものと可知的なものを分かってくれるかね。

分かります。(509D1～5)

ソクラテスはまずはじめにこう言って、「太陽の比喩」から「線分の比喩」へと引き継ぐべき点をまとめる。可知の種族の王、つまりは善のアイデアと、可視の種族の王、つまりは太陽があり、それぞれの場所があるということである。

それでは、いわば、ふたつに分けられた線、(ふたつの)等しくない<sup>2)</sup>線分を考えて、更に、同じ比で、それぞれの線分を分けてくれたまえ。ひとつは可視の種族の線分で、もうひとつは可知の種族の線分なのだが、すると君には、明確さと不明確さでもって、それぞれ相互に、まず一方で可視の方において、片方の線分は似像としてあるだろう。そして僕は似像を、第一には、影として語っている。それから、水に映る幻や、隙間なく滑らかで明るいものどもを構成したようなものに映る幻や、すべてのこのようなもののこととして語っているのだ。もし君が理解してくれるなら。

はい。理解します。(509D6～510A4)

ここで問題となる線分は与えられる。Adam は、次のような図を用意

「線分の比喩」について（小島）

している<sup>3)</sup>。



AC が可視の種族の線分で、CB が可知の種族の線分となり、AC のうちで、AD は DC の似像としてあるということが語られている。AD は、水や鏡に映る幻である。

更に、もう一方を、それが似ているところのものだと想定してくれたまえ。つまり、僕達の周りのすべての動物や植物や人為的な種類のもの全体のことだ。

想定します、と彼は言った。（510A5～7）

そして、DC が、AD が似ているところのもの、動植物や人工物、つまり、この我々の住む世界の一般のもの、ということになる。アイデア論を語るときによく使われる言い方をすれば、「個物」であろう。

僕は言った。では君はこのことも主張する気があるだろうか。真理と非真理でもって、知られるもの（γνωστόν）に対して思惑されるもの（δοξαστόν）が分けられるように、似せられているところのもの（τὸ φωμοιωθήν）に対して、似せられているもの（τὸ ομοιωθὲν）が分けられていると。

彼は言った。少なくとも私は大いに主張します。（510A8～B1）

ここでの、「知られるもの」と「思惑されるもの」が何を指すか、というと、可知的なもの（νοητόν）と可視的なもの（ορατόν）の言いかえとみてよいだろうから、線分上では、CB と AC を指すことになるだろう。「線分の比喩」の前に語られた、「太陽の比喩」において、「真理」

が割り当てられるのは、勿論、可知の種族と場所のほうにである。ゆえに、ここの文言で言われているのは、最初の線分の比による分割の確認である。AB が、「真理と非真理でもって」、AC と CB に分けられるのと、同じように、同じ比で、AC も、似像とその元のもの、AD と DC に分けられるのだということである。

では更に可知の部分の切り分けもどのような方法で切り分けられるべきか、熟考してくれたまえ。

どのような方法でしょうか。

以下のような方法でだ。その一方を、魂は先の似せられているところのものを（τοις τότε μιμηθειςιν）、似像として使用しつつ、仮説（υπόθεσις）からはじめて、始原へではなく、終局へ向かいつつ、探求しなければならず、また別のもう一方を、仮設のない始原へ向かう方だが、仮説からはじめてかのものについての似像なしに形相自体でもって、それらを通して追求し、探求しなければならないのだ。

彼は言った。おっしゃっていることが十分に分かりませんでした。（510B2～10）

ここで明らかなのは、可知の部分の切り分けは、可視の部分の切り分け、似像と元のもの、といった方法で切り分けられるのではない、ということである。しかし、「分かりません」とグラウコンが言うように、この切り分けの説明は難しい。CE のほうは、DC を似像として使用しつつ、「仮説」を使って探求するところのもの、EB は仮説からはじめはするが、形相自体でその探求を行うところのもの、というように言葉を追っていくことはできる。けれどもやはり分かりにくいのは、AD・DC の説明のときには、その対象となるものを端的に示しているのに、CE・EB の説明であるここでは、その対象となるものを示さず、その対

象となるものを探求するときの方法上の違いで、CE と EB の違いを説明しているからである。

しかし、ソクラテスは、分からなかったグラウコンに対して、その対象となるものを示すという仕方の説明し直すといったことはせずに、CE の対象を探究するときの方法の例を出す。

よろしい、もう一度だと僕は言った。というのは次のことどもが前もって言われていることで、より簡単に君は学べるだろうから。というのは、思うに君も知っているだろうが、幾何や算術やそのようなものどもを研究する人々は、奇数や偶数や図形や角の三種類<sup>4)</sup>やその他それらの類のものどもを、それぞれの方法に従って前提し、一方でそれらを、彼らは知っているのだとして、それらを仮設とした上で、自分達自身にも他の人々にも、更にそれらについて説明するのはまったくふさわしくないと考える。万人に明らかであるとして。他方で、それらからはじめて、すぐにあとのものどもをすっかり調べて適合して、その考察を目指して出発したところのものに辿りつく。

まったくもってそうです、と彼は言った。そのことなら知っています。(510C1～D4)

その例が、「幾何や算術やそのようなものども」なわけである。彼らは、「仮説」を使うという方法で探求をする。たとえば、ひし形の面積を求めたいとき、いくつかの仮説（対角線、長方形、合同など）を用いる。そのひし形の対角線のそれぞれを辺とする長方形を考えて、ひし形を囲む形で長方形を配置する。すると、元のひし形の対角線によって区切られる四つの三角形は、長方形によって作られたそれぞれの隣接する三角形と合同になるため、長方形の面積はひし形の面積の二倍になる。故に、ひし形の面積は、対角線の積の半分ということになる といった

ようにであろう。

それでは、次のことも（君は知っているだろう）。見られる形を更に利用し、それらについて話し合うが、それらについて考えているのではなく、それらが似ているところのかのものどもについて考えているのであり、四角形そのもの（τὸ τετράγωνον αὐτό）や対角線そのもの（[η] διάμετρος αὐτή）に関して話し合うのであって、彼らの描くそれに関してではなく、その他も同様であり、一方で彼らが作り描くところのそれら自体は、それらの影も水の上の似像もあり、それらを一方で彼らはまた、似像として用いて、他方で、人が思惟でもって以外の仕方では見ることができないかのもの、そのものどもを見るように努力しているわけだ。

おっしゃるとおりです、と彼は言った。

それ故、僕は一方のこの種類を可知のものと言った。しかし諸々の仮説を使うことを魂は強いられ、その探求にあたって、始原へは向かわず、諸々の仮説より上へ踏みだすことができない。また、より下のものどもによって写されたそれらのものどもを、似像として使う。そのかのものどもも、あのかのものどもと比べると、明らかなものとして思われ尊ばれるのである。

分かりました、と彼は言った。幾何学やその兄弟の術のもとにあるもののことをあなたは言っているのですね。（510D5～511B2）

ここでは、また、先の「幾何や算術やそのようなものどもを研究する人々」が、DC を似像として用いつつ、CE を探求しているということが示される。ちなみに、このように下位の線分のものを似像として用いて、その上位の線分のものを探求する方法は、この、DC・CE 間にもみられるようだ。またそれが、「幾何学やその兄弟の術」と言われている。

「線分の比喩」について（小島）

なお、「四角形そのもの（τὸ τετράγωνον αὐτό）」、「対角線そのもの（[η] διάμετρος αὐτή）」という表現は所謂イデアを表す表現であることに留意したい。

それでは、もう一方の可知の部分の切りとった部分を、言葉自身が対話することの力でもって把握するところのものだと僕が語るのを分かってくれたまえ。言葉は諸々の仮説（υπόθεσις）を始原とすることなく文字通り下におかれたもの（υπόθεσις）とし踏み段や出発点とする。仮説ではないものまで、万物の始原へと行き、それを把握し今度は逆に、かのものでもの後に続くものどもにしがみつきつつ、そのようにして最後までおりていくために。全くもって一つも感覚をさらに用いることはなく、形相のみでもって形相を通り、形相へと行き、最後に形相の中へ行くために。（511B3～C2）

これが最後の EB の部分の説明である。仮説を踏み台にして「万物の始原」へと赴き、また戻ってくるということがここでは語られている。しかし、それが具体的にどのようなものかは語られていないし、少なくとも私には先のひし形の面積のような例示は思いつかない。

彼は言った。一方で分かりました。十分にではなく というのは、あなたは大変な仕事を語っていると思われるから もちろん、実在と可視の部分のうち、対話することに属する知識（επιστήμη）によって見られるものは、術（τέχνη）とよばれているものどもによって見られるものよりも、より明らかであるとあなたは定義したいのだ、と。術と呼ばれているものどもにおいては、仮説が始原であり、かつ一方で思惟でもって、感覚ではなくそれらを観察する人々は観察しなければならず、他方で、始原までのぼって



いって考察するのではなく、仮説からであるが故に、彼はそれらについて知（*vous*）を持たないとあなたには思われている。それらは、始原とともにある場合には、可知の部分の対象となるものどもではあるが。他方で、私にはあなたが、幾何学者や、そのような人々の姿勢（*ἐξίς*）を知ではなく、ディアノイア（*διάνοια*）と呼んでいると思われます。何か、思惑（*δόξα*）と知の間にあるものとして。（511C3～D5）

CE の探求の仕方はあくまでも「術」であり、EB の探求の仕方である「対話することに属する知識」とは違うと言われる。この『国家』も含め、プラトン作品の随所で、「術」は「知識」と同義に用いられているが<sup>5)</sup>、この箇所と、この後の 533A～E でのみ、「術」が「知識」と区別されている。話の内容もその二つの箇所は同じで、哲学的な対話だけが、本当の意味で「知識」を得ることができ、他の「術」とは区別されるのだという内容である。

ちなみに、この 533A～E を読むと、CE の対象となるものは EB の対象となるものと同一であり、それは諸々のイデアであるということが分かる。「残りの術（幾何学その他）は真実在（*τὸ ὄν*）をある程度（*τι*）把握する」（533B6～7）、「（幾何学その他の術は）真実在（*τὸ ὄν*）について夢を見ている状態であり、目が覚めた状態で観ることはそれらの術にはできない」（533B9～C2）との文言である。真実在（*τὸ ὄν*）がイデアを指すことは当然であるし、「ある程度」ではなく把握し、また「目が覚めた状態で観る」ことができるのは、対比させられている哲学的な対話、つまり EB における探求方法である。となると、ここの説明は、CE と EB の対象となるものは同じく真実在（*τὸ ὄν*）であり、それは所謂イデアであるということになる。またプラトンにおいて、「可知のもの（*νοητόν*）」と言ったとき、それがイデア以外をさすことは想像し難いように思われる。イデア以外の「可知のもの（*νοητόν*）」も、

「可知のもの（νοητόν）」以外のアイデアも、この「線分の比喩」を読んで CE の対象を何か別ものにとらない限りは、他の作品からは、少なくとも私の見る限りでは出てこないからである。

また、テキストに戻ると、「思惑と知の間にあるもの」として「ディアノイア」が登場している。このギリシア語は「考え」、「思考力」、「思惟」、「精神」などと訳出のできる単語であるが、もともと「思惑と知の間にあるもの」という意味があったわけではない。「思惑と知の間にあるもの」をプラトンが、もともとあったこの単語でそう呼んだということであろう。

僕は言った。この上なく十分に君は理解してくれた。そして私のために、それら四つの線分の上に、それら四つの魂に生じる状態（πάθημα）を受けとってくれたまえ。

一方で、一番上には、ノエーシス（知性、νόησις）を、他方、二番目にはディアノイア（διάνοια）を、また他方で三番目にはピステイス（信、πίστις）を、そして最後には、エイカシア（憶測、εἰκασία）を割り当ててくれたまえ。そして、それらを、ちょうど、それぞれの対象が、真を分有しているように、そのようにそれら（の状態）が明確さを分有していると見做しつつ、比喩させて並べてくれたまえ。

彼は言った。分かりました。同意しますし、あなたのおっしゃったように並べます。（511D6～E5）

先にグラウコンが「知」と呼んだものが、「ノエーシス」と言い換えられている。また、AD・DC にあたる状態にも名前がつけられ、「エイカシア」と「ピステイス」といわれる。これらは二つとも「思惑（δόξα）」である。また、ここで留意しなければならないのが、AD・DC ではその対象は目で見られるものとして、鏡などに映った幻と、その原

物であるこの世の事物と喩えられていたが、この魂の状態の説明を考慮に入れると、それがやはり喩えでしかないことがわかる<sup>6)</sup>。「線分の比喩」ではやはり EB の部分の説明が主になされていると考えられる。

### 3 伝統的な解釈

以上、「線分の比喩」を細かく見ていったわけだが、その伝統的な解釈としては次のようになる。「線分の比喩」は、明確さによって上昇していく魂の状態の四段階と、真実性によって上昇していく対象の四段階があり、両者は対応しているという解釈、である<sup>7)</sup>。このようにまとめるとこれ自体は一見問題がないように思われるが、こういった解釈に反対するものとしては、Ferguson の解釈が代表として上げられよう<sup>8)</sup>。Ferguson は、「太陽の比喩」中の「昼の光（τὸ ημερινὸν φῶς）」(508C5) と「夜の光（νυκτερινὰ φέγγη）」(508C6) という言葉に着目し、そういった視覚における区別が、認識における区別を比喩しているのだと言う。大卒で言ってしまうと、四つの段階は連続しておらず、あくまでも CB を喩える・象徴する形で、AC があるのであり、AC はあくまでも喩え・象徴としての「見られるもの」であって、そのままこちら側の世界、感覚世界の説明なわけではない、といったところであろう。彼はこれまでの解釈は象徴されるものを象徴と混同しているとさえ言っている。しかし、「こちら側でこうであるように、向こう側ではこうなのだ」と言ったとき、それがこちら側の説明になっていないとどうして言えるだろうか。それに、あくまでも「太陽の比喩」の途中で一回説明されるだけの「夜の光」と「昼の光」という言葉の区別をそこまで重視するには何らかの説明がなければいけないであろう。どうしてプラトンがそこをもっと強調しなかったのかという理由が提示されなければならないはずである。しかし私の読んだ限り、Ferguson は、そのような説明を与えてくれない。

また、もうひとつ、伝統的に、もしくは Adam の描いた図の影響により、この線分は横に書かれることが多い。線分を横に描くか縦に描くかという点については、様々な議論がなされてきた。Smith が諸家の議論をまとめている<sup>9)</sup>。Smith のあげるところによれば、線分を横に描く研究者は 7 人、縦に描く研究者は 4 人である。Smith 自身は縦を主張するので彼を入れれば 5 人になる。しかし、この問題はごくごく瑣末なことではないと思われる。確かに、上昇を語るといったときには、縦に描いたほうがそれに即しているとは言えるが、横に書いたとしても右側が（もしくは左側が）上昇方向なのだという理解があれば何の問題もない。プラトン自身がそれを明記していない以上、そこに拘泥するのは滑稽である。

#### 4 長さについて

線分を横に描いたとしても縦に描いたとしてもその点は大した問題ではない、それよりも、今までほとんどの研究者の目をくらませてきた事態がある。それは、分けるときの線分の長さの話である。そもそもこの「線分の比喩」の冒頭部、509D6 のあたりの読みには、「(二つの) 等しくない線分を考えて」ではなく、「(二つの) 等しい線分を考えて」という読みもあるわけであり、また、等しくなく分けたとしても、実際のところ、具体的な長さには言及されていないのである。つまり、AC と CB（または AD と DC、CE と EB）は、どちらが長くても構わないのである。結局、最後の、「そして、それらを、ちょうどそれぞれの対象が真を分有しているように、そのようにそれら（の状態）が明確さを分有している」と見做しつつ、比例させて並べてくれたまえ」のところで、具体的な長さのことは特には言っていないのではなからうか。まず、ここで使われている動詞は、あくまでも「並べる（τάττειν）」であって、「切り取る」などの動詞ではない。また、「比」、「比例」と訳してしまう

と、確かに、線分を切り分けたりして「長さ」を問題にしがちではあるが、もともとこの「比例して」は  $\alpha\lambda\lambda\ \lambda\acute{o}\gamma\omicron\nu$  という成句で、確かに比や割合を示しはするが、それ以上に、こうして使われる  $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$  には「関係」「釣合」と言った意味も強いのである。このように、考えていくと、これまで問題となっていた DC と CE の長さが等しくなるのではないかという問題にも片がつく。そもそも、具体的な長さのことは触れられていないからである。「具体的な」と限定しているのは、あくまでも対応関係ということでの比を出す段階での線分が持っている長さは、当たり前だが勿論、プラトンはイメージとして持っていたからである。最初の線分が不等に分けられるとして、AC と CB の関係と AD と DC の関係が、また CE と EB の関係が、同じようなものとしてある、というときにその長さのイメージは必要である。だがしかし、あくまでも関係性の相似を表しているだけで、その具体的な長さが、その長い短いが何を示しているといったことは、プラトンは書いていないのである。よって、DC と CE の長さが同じになるのはなぜかという疑問はきわめてナンセンスだということになってしまう。さらに言えば、プラトンはその二つを独立させて比べて語るようなことは、微塵も言っていない。確かに、CE を探求するときの幾何学者が、DC を似像として用いるというようなことは言ったけれども、それはあくまでも幾何学者の行う方法の話であって、決して CE にある対象そのものと DC にある対象そのものの関係を語っているわけではない。ちなみに、そういったことを念頭に置くと、この線分を具体的な長さによる検討も含め、数学的な角度から考察したといえる Balashov の仕事<sup>10)</sup> は多分に無意味であったと言わざるを得ないであろう。

## 5 対象について

ともあれ、伝統的解釈の中にある一番大きな問題点は、「対象の四段

階」があるという点であろう。先にテキストを追って確認したように CE と EB の違いは対象の違いとしては語られておらず、またその対象は、読み取れる範囲では一緒であり、アイデアであったからである。CE と EB の間に対象による段階の差異はないのだ。

しかし、これまでの研究者たちはこの対象の差異をはっきりさせたがっていた。特に CE についてはアリストテレスの証言の影響もあって<sup>11)</sup>、Adam は CE を「数学的对象」としており、これは比較的受け入れられている解釈である<sup>12)</sup>。Hahn などはほとんど反省なくそれを受け入れ、幾何学的図式で表されている「線分の比喩」そのものもこの CE にあたるディアノイアの対象であるという主張をするのである<sup>13)</sup>。また Carrière はディアノイアの対象を「数学的具体モデルと抽象」としているわけだが<sup>14)</sup>、これも Adam の線上にある解釈であると言ってよいだろう<sup>15)</sup>。

ちなみに、数学ということでここでは幾何学までしか示されていないが、『国家』524D～531C において、哲学的問答法（ディアレクティケー）を学ぶ前の予備教育としては五つの術があげられている。「計算術」「平面幾何学」「立体幾何学」「天文学」「音階学」の5つである<sup>16)</sup>。故に、幾何学者の方法が例にあがっているからといって、それだけを見て、それに準拠して CE を語ってしまうのは過ちであろう。もしかしたら星々もここには対象として入るかもしれないのである。

ともあれ、そもそも CE と EB においてプラトンは方法上の違いしか語っていないのである<sup>17)</sup>。さらに、511C の「それらは、始原とともにある場合には、ノエトンの対象となるものどもではあるが」という一説も、CE と EB の対象が同じものであることを示していると言えるだろう。同じものだが、探究の方法の違いによって、それに対する魂の状態が違ってくるのである。また、534A でもプラトンの描くソクラテスは、「線分の比喩」を振り返り、ドクサストンとノエトンのそれぞれを分割して考えることはやめておこうと言っている<sup>18)</sup>。

また、線分の長さが等しくなるということも踏まえるなどして、CE

と EB ではなく、DC と CE の対象をある意味同じだとする説もある。説得的なところでは、Morrison の研究があげられる<sup>19)</sup>。彼は、DC と CE の対象の同等性をとき、数学などの諸学は両者にまたがるものであり、可知界と可視界にまたがって位置するものであるということをプラトンは言いたかったのだとする。確かに数学などの諸学はまたがって位置するものであろう。その結論は間違っていない。しかし、それは DC と CE の同等性から持ってもなくても言えることではないのだろうか。それらの諸学は哲学的問答法（ディアレクティケー）を学ぶ前の予備教育としてあるのであり、それが感覚的事物からイデアへと学ぶものを導くのは役割として当然であり、そういった意味でまたがっているとは考えられよう。また、そのことは、後で詳しく説明されている<sup>20)</sup>。

さらに、目新しいところと言えば先の Smith はディアノイアの対象をイデアの似像としてのこちらの世界の個物であるとする。先の Morison も DC と CE の同等性を語っているが、どちらもこちらの世界の個物を示しているとする Smith の解釈のほうが刺激的かもしれない<sup>21)</sup>。確かにそうすれば、先の DC と CE の長さが同じことも説明がつくのかもかもしれないが、しかし、「似像」と「そのもとのもの」という関係は、AC・CB 間と AD・DC 間にだけ言われているのであり、彼のいうようにこの比喩全体に一貫しているというわけではない。また幾何学者の用いる対象と考える対象の区別も混同しているように思われる。

## 6 方法について

次に、その CE と EB を分ける方法上の違いについてみていくことにする。ポイントとなるのは「仮説（ヒュポテシス）」である。この言葉で連想されてくるのは、やはり、『パイドン』における第二の航海、仮説演繹法であろう。天野は、『パイドン』における仮説演繹法を、「仮説、整合性の検討、仮説の正当化という三段階からなる」とし、

「線分の比喩」における CE の部分の探求は、「 仮説の正当化」にあたるとし、また EB の探求については、『パイドン』には現れていないものだとして解釈している<sup>22)</sup>。しかもその、EB の探求については、プラトン自身もその探求を行ったわけではなく、具体的に考えていなかったのではないかとすら言う。彼のこのような考察は、プラトン作品のクロノロジーをもとにした発展史的な理解に基づく。『国家』前後の彼の解釈は、次のようなものだ。プラトンは『パイドン』において仮説的方法をたてた。続けて執筆した『国家』においては、さらにその先の方法、仮説から出発して始原へと遡る方法での探求を、この線分の比喩において打ち出しはしたが、それは遂行しがたいと考えて、以後そういった始原である 善のアイデア を究極目標とするような探求法は語らなくなった。次にプラトンは続けて執筆した『パルメニデス』においてアイデア論の根本的な再検討を行うことになる。このような見通しは、分かりやすいため魅力的で、一見射っているかのように思われるが、あくまでもひとつの可能性でしかないと思われる。何故なら、天野がもとにするところのプラトンの諸作品のクロノロジーは、あくまでも天野自身が書くように「私なりに理解している<sup>23)</sup>」ものでしかないからである。そういった可能性は、例えば、ミドルプラトニストたちやネオプラトニストたちの理解、つまり、宇宙は一者と呼ばれることになる 善のアイデア を頂点とする階層構造になっており、その説明をプラトンは作品においてしているという理解と、可能性のひとつであるという点では、それほど変わらない。

EB の探求方法に関してのもっと踏み込んだ考察は、Szaif に見られる<sup>24)</sup>。Szaif は「線分の比喩」におけるディアレクティケーを、ソクラテスのエレノコスや『パイドン』における仮説演繹法と同じく、あくまでも言葉によるものだとして、非理性的な直観の入る隙を与えない。しかし、それで超越的なものである 善のアイデア にどうしてたどり着けるというのだろうか。Szaif は、ここにプラトン自身の揺らぎを見るわ



けだが、このことは、『饗宴』と比して考えてみると面白い。『饗宴』において、上昇していく恋の道は、やがて究極の美へ行き着くわけだが、その最後の段階には飛躍があるのである<sup>25)</sup>。おそらくこの究極の美は、善のアイデアであり、「線分の比喩」における万物の始原と同一のものであると思われるが、その最後の飛躍については『国家』には描かれていないのである<sup>26)</sup>。

ともあれ、EB に出てくる「万物の始原」を 善のアイデア とみなさない研究者は私の知りうる限りでいないし、それには賛成である。だが、いくら「万物の始原」と名前を変えて 善のアイデア が登場してしようとも、それでは困るのである。グラウコンが尋ねていたのはあくまでも、「善のアイデア が太陽と似ている点」なのであるから。

とすると、善のアイデア が太陽と比して出てくる箇所をこの「線分の比喩」よりあとに探してみると、「洞窟の比喩」においてまさにそれが語られているのがわかる。515E 以下で、囚人が洞窟から抜け出して、善のアイデア を見るときの話だが、善のアイデア を見るには慣れが必要であるということが、太陽を直に目で見た場合になぞらえて説明されているのである。またそれ以後、善のアイデア を太陽になぞらえた説明が続く。ここで、グラウコンの要請に対して応えているということになる。

またこのことは、「洞窟の比喩」の冒頭からも読み取れたことかもしれない。「太陽の比喩」と「線分の比喩」の間には本論の冒頭で挙げたようなグラウコンとのやり取りがあるが、「線分の比喩」と「洞窟の比喩」の間にはそのようなものはないのである。

つまりは、「太陽の比喩」、「線分の比喩」、「洞窟の比喩」という所謂三比喩はそれぞれ独立したものではないことは明かだが、特に「線分の比喩」と「洞窟の比喩」はひとつのものなのではないだろうか。従来伝わっている写本では、「線分の比喩」と「洞窟の比喩」の間で、巻が分かれてしまうわけだが、内容的にはそこで分かれてしまうことはない

のである。

## 7 おわりに

この「線分の比喻」が物語るのは、「太陽の比喻」で語られた二つの王、「太陽」と善のアイデアの下で、私たち人間がどのような認識を得られるかということである。本論では、あくまでも「線分の比喻」でプラトンが話題の中心としているのは認識する側の心の状態の問題なのであり、そこに何が対象としてあるかは問題とされてはいなかったことが確認された<sup>27)</sup>。また、善のアイデアの下での認識は、その対象は総じてアイデアなのだが、始原である善のアイデアに至るか否かで二通りの認識に分けられていた。そしてそこまでが、「線分の比喻」で語られたことであり、「線分の比喻」だけでは、まだ「太陽の比喻」において「語り残したこと」が語りつくされたわけではなかった。グラウコンの聞きたい「善のアイデアが太陽と似ている点」、すなわちソクラテスの言う「語り残したこと」は「線分の比喻」と「洞窟の比喻」にわたって語られるものであり、そういった意味で、「線分の比喻」と「洞窟の比喻」のつながりは強い、ということが明らかになった<sup>28)</sup>。

また、この「線分の比喻」で新しいトピックとして出てきているのが、哲学的問答法（ディアレクティケー）に至るまでの予備教育としての諸学、術（テクネー）である。Annas も指摘するように<sup>29)</sup>、「線分の比喻」はこちら側である感覚世界、可視の場所から、アイデアの世界である思惟世界、可知の場所への連続性を強調しているとも言えよう。それらは続いていて、私たちはより素敵な方へと向かうことができるのだが、それを可能にするものは、幾何学などの諸々の学問、つまりは、哲学を目指して研鑽するための予備的な学問だけなのである。とにかく、プラトンはそれを言いたかったのであろう。それが今日の私たちにとっても真実であるとする哲学研究者はきわめて少ないであろうが。

## 注

- 1) 「天空の」は οὐρανοῦ で、「可視の」は ορατοῦ である。この二つは似ているので、わざわざ「天空の」と言って語源的なつながりを知ったかぶっているように思われたくはないということ。
- 2) ἀνίστα であるが、αν を削除して、ίσα と読んだり、αν ίσα と読んで「等しい」と読む校訂者もいる。しかし、ほとんどの校訂者は「等しくない」という読み方を採っている。
- 3) J. Adam, *The Republic of Plato*, 2 vols. 2nd ed., Cambridge : Cambridge UP, 1963, p. 65.
- 4) 鈍角、直角、鋭角のこと。
- 5) 『国家』においては、342B、438D、他の作品では、『ソピステス』232A、『ポリティコス』258B～D、297B、『ピレボス』55D～E、56E～58E などである。
- 6) AD・DC の部分の詳しい説明は「洞窟の比喩」に持ち越されている。cf. C. P. Sze, “ΕΙΚΑΣΙΑ and ΠΙΣΤΙΣ in Plato’s Cave Allegory,” *The Classical Quarterly*, Vol. 27, No. 1, 1977, pp. 127-138.
- 7) R. C. Cross & A. D. Woozley, *Plato’s Republic*, London : Macmillan, 1966, pp. 196-230.
- 8) Ferguson は、Cross & Woozley よりも古い世代の研究者。Cross & Woozley が前掲書の中で、伝統的解釈への批判者として Ferguson をあげて再批判している。参考にした Ferguson の論文は以下の三つである。  
A. S. Ferguson, “Plato’s Simile of Light, Part I,” *The Classical Quarterly*, Vol. 15, 1921, pp. 131-152.  
    , “Plato’s Simile of Light, Part II,” *The Classical Quarterly*, Vol. 16, 1922, pp. 15-28.  
    , “Plato’s Simile of Light Again,” *The Classical Quarterly*, Vol. 28, 1934, pp. 190-210.
- 9) N. D. Smith, “Plato’s Divided Line,” *Ancient Philosophy*, Vol. 16, 1996, pp. 25-46.
- 10) Y. Balashov, “Should Plato’s Line Be Divided in the Mean and Extreme Ratio ?,” *Ancient Philosophy*, Vol. 14, 1994, pp. 283-295.
- 11) アリストテレスは『形而上学』において、987b15 をはじめとして随所で、プラトンは感覚的事物とエイドスとの間に数学の対象となる事物をおいたということを述べている。
- 12) ただし、第2版の際に序文を書いた D. A. Rees はそれに反対している。
- 13) R. Hahn, “A Note on the Divided Line,” *Journal of the History of Philosophy*,

Vol. 21, 1983, pp. 235-237.

- 14) P. Carrive, "Encore la caverne, ou  $4 = 8$ ," *Les études classiques*, t. 4, 1975, pp. 387-398.
- 15) なお、Ross は、CE および EB の対象をどちらもイデアとしつつも、前者は「数学的イデア」であり、後者は「その他のイデア」とであるとする。だが、そのような単純な区別であるのなら、ソクラテスは 534A においてその区別の説明を避けることはなかったであろう。cf. W. D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, Oxford : Clarendon Press, 1951.
- 16) M. Miller, "Figure, Ratio, Form : Plato's Five Mathematical Studies," *Aperion*, Vol. 32, 1999, pp. 73-88. において、これら五つの準備学の相互関係と、哲学的対話へと至る導きが丁寧に語られている。
- 17) まさに、「CE と EB という二つの異なる対象がまずあって、次に魂がそれぞれを対象とする場合に、対象の相違ゆえにディアノイアとノエーシスというメトドスの相違が出てくる、というのではない。それは逆である。ディアノイアとノエーシスと名づけられる魂のあり方、はたらき方が異なるゆえに、同じ対象について CE と EB という相違が生じてくる」（久保康夫「ディアノイアの対象について」『古代哲学研究』第 1 号 古代哲学会 1968 年、16 頁）のである。
- 18) このこと、ソクラテス自身が 534A において対象の区別を避けているということは、Robinson も指摘している。cf. R. Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, 2nd ed., Oxford : Clarendon Press, 1953, p.193.
- 19) J. S. Morrison, "Two Unresolved Difficulties in the Line and Cave," *Phronesis*, Vol. 22, No. 3, 1977, pp. 212-231.
- 20) 『国家』522B ~ 531C.
- 21) Smith は厳密には、二つを、Particulars as images of forms、Particulars as construed as visible originals と呼んで分けている。
- 22) 以下、天野正幸『イデアとエピステーメー』 東京大学出版会 1998 年、第三章より。
- 23) 同上、13 頁。
- 24) J. Szaif, "Platon über Wahrheit und Kohärenz," *Archives für Geschichte der Philosophie*, Bd. 82, 2000, S. 119-148.
- 25) 『饗宴』210E で、恋の道を教導かれ諸々の美を順を追って観てきた者が、おしまいまで来て、「突然（εξαίφνης）」究極の美を観るということが言われている。
- 26) なお、この飛躍を重視するかしないかに、先の天野の発展史的解釈とネオプラトニストたちの解釈の違いはあるのかもしれない。
- 27) AC と CB の対象の違いは、すでに「太陽の比喩」で語られており、それ

を踏まえて「線分の比喩」が始まるという流れになっている。そして「線分の比喩」では、そのそれぞれの中での、特に CB の中での、対象の違いは問題になっていないし、語っていないのである。

- 28) 「線分の比喩」で語られた四段階の認識があり、「洞窟の比喩」ではそういった認識に至るまでの人間の道程が八段階に分けられて語られるわけだが、それがどこまでパラレルな構造になっているのか、また、そこで 善のアイデア が再びどのように語られるのか、その詳細はまた稿を改めて考察することにした。特に「線分の比喩」と「洞窟の比喩」のパラレルな構造を読み解くことについてはさまざまな議論があるからである。
- 29) J. Annas, *An Introduction to Plato's Republic*, Oxford : Clarendon Press, 1981, p. 254.

（哲学科 助手）